

牧野 衛さん

終戦当時:7歳

1937(昭和12)年10月7日

関東州大連生まれ

当時:在満国民学校2年生



●1945年(昭和20)、満州国西安に一家で移り住む。

満州国國務院の官吏だった父は、五、六度目の転勤でこの街の役所の財務課長をやっていたのです。当時満州国では官庁のトップは必ず満人だったのですが、彼らには全く権限が与えられておらず、発言者や決定者は全て二番目以降の日本人なんですね。愛新覚羅溥儀を満州国皇帝に仰ぎ、対外的には独立国家としてスタートしたものの、実態は傀儡国家だったのです。

これでは満人がかわいそうですよ。もうちょっと上手にやっていたら反感を買うこともなく、その後の満州国もある程度安泰だったかも知れないと思いますよ。

●1945年(昭和20)8月9日、ソ連軍満州に侵攻。

八月半ばのその朝は天気も良く、いつもと同じように父はいないから(五月に現地召集で二度目の出征)母子四人で遅い朝食をとっていたんです。その時急に表通りが騒がしくなったので、カーテンの隙間から覗いてみると何台もの軍用車に分乗して、手に銃を持ったソ連兵が、奇声を発しながら通っていたんです。周りにいる満人がみんな万歳万歳して手を叩きながら喜んでいるわけです。日本の旗など取り払われて、代りにソ連と満州の旗で埋めつくされました。満人のこの豹変ぶりを見て、日本の敗戦を実感しましたね。

その直後です。満人の群衆に異様などよめきが起って、大音響と共に、玄関の扉が壊されて暴徒と化した満人が、それこそ洪水のようになだれ込んできたのです。そのあとはまさに阿修羅の光景、大声で喚きながら家具類や押し入れの中は勿論のこと、窓枠、扉、畳から最後には床板や天井板まで剥ぎ取ってしまったんです。また、別の一団は私達親子を取り囲んで身体検査をし、腹巻きに縫い込んでいたお金を取り上げ、それを仲間同士で奪い合っているんです。

喧騒が去った約二時間後、つい先刻まであった見慣れた生活の場は跡形もなく消えていて、私達は屋根と柱と壁だけを残した家の中で、丸見えとなった外の景色を茫然と眺めるだけでした。人体に危害を加えられなかったことが信じられないほどでした。その時着ていた服と慌てて履いた靴だけが全財産となってしまいました。

気をとり直してとぼとぼと外に出ると、同じ被害に逢った人々と出会い、誰言うともなく一緒に歩きはじめたんです。道々合流する人達も含めてその数は次第に増えていきました。働き盛りの男は召集されていて、残った女子供が大半の集団ですよ。

無言の行進は先行きの見通しが全くつかめない中で、有志の人が善後措置を相談して、どこかわからないけど今は空家となっている大きな建物に集結して、一夜を明かすことになったんです。これから後、一年にわたる永く苦難に満ちた流浪の旅が始まるんです。点々と移動して居住地が変わったのは数回以上だったでしょうか。移動は歩くか、または運がよければ屋根のない貨車だったりですよ。

生活のために男は炭坑や荷役に従事し、女は満人家庭の草取りや子守りなどでなにがしかの賃金を得て、外仕事のできない女の人は食事を作ったりして協力しました。食事といっても名ばかりで、高粱(コウリヤン)のご飯に具の少ない味噌汁が普通でしたね。

こんな日常の中で栄養失調で友達を何人か失ったし、移動中に病気などで置いて行かれた人を何人も見てるんです。それは親が悪いんじゃないんです。もうどうにもならないんです。食べ物は少ない、子供は痩せ細り、でその子を買ってくれという満人が何人も来るんです。

一番悲惨なのは歳をとった方ですよ。やっとなるところまで来たけれど、もう杖をついても歩けませんという人もいるわけ。「もういいから置いて行ってくれ」って言う人もいる。涙をのんで置き去りにされた人もいたんですよ。

私達なんか母親が一人で一番下の弟はまだ半分おんぶの状態だったんです。まだ三歳弱でね。その時母は確か二十九歳だったと思うけど、よく子供三人とも死なせずに無事に日本まで連れて帰ってくれたものだと感謝していますよ。母は強いと思った、あの時に

●1946年(昭和21)8月31日、葫蘆島から佐世保に引揚げる。

(収録日:2014年5月10日)